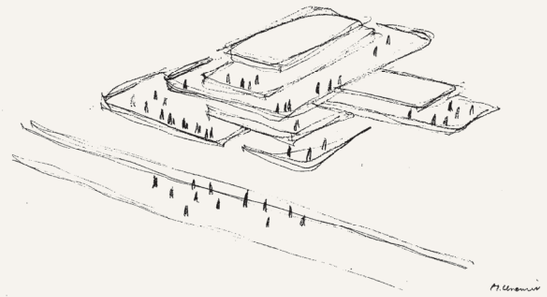

TURNING POINT
3

# 建築家からの提案

Interview 畝森泰行さん

## フロアをずらして重ねるダイナミックな構造 〝融合〟のコンセプトも建築的に表現

平成25年、市民交流センターのプロポーザルが始まるにあたり、まずは街を知ろうと須賀川に行ってみました。震災から2年ほど経っていましたが、松明通りは人通りが少なく、だからこそこれから作られる市民交流センターの意義もよくわかりました。須賀川の第一印象は、坂が多く、人が明るい街。その明るさが地域全体に広がる、そんな建物を提案したいなと思いました。建築で明るさを表現するにはガラス張りにしがちですが、ガラス越しではなく直接人が見えるようにしたいと、テラスや吹き抜けを作ろうと考えました。この建物は、各フロアを少しずつずらしながら上に重ねる構造。ずらすことでテラスも作れます。通常であれば1階から大きな柱を立てる必要があるのですが、1階は遠くまで見渡せる「通り」のような広い空間にしたかった。柱を使わず実現するため、3階と4階の床の一部をトラス梁を使った頑丈な構造にし、そこからずれた床を吊り上げています。プロポーザル時点では、図書館のフロア、公民館のフロアというように機能別に分けて考えていましたが、ワークショップで「子どもの遊び場のそばに絵本もあったほうがいい」とか、「料理教室にレシピや食育の図書もあると嬉しい」という意見があり、図書は図書館エリアにあればいいわけでもないんだな、とわかりました。そうしたことから施設全体が図書館で、施設全体に市民活動の場がある〝融合〟というコンセプトに至ったのです。

すると今度は、各フロアをずらすという当初の計画のままでは〝融合〟に合わないのではと気づきました。各フロアの建築的なつなげ方とはなんだろうと悩んだ末に、緩い階段や長いスロープ、ブリッジで繋げる今のプランに至ったのです。結果的に、緩やかに各フロアをめぐっていく動線が生まれ、連続的な体験ができる建物になりました。特に床全体が傾斜している1階は、坂の多い須賀川の街が入り込んだような、この場所ならではの自然な空間が生まれたと思います。

複雑で変わった建物のように思うのですが、須賀川のみなさんは前向きでした。使う人が面白ければ建築はよくなる。そんな施設になってほしいです。

畝森泰行建築設計事務所
畝森泰行

第28回新建築賞などを受賞。住まいで過ごす個人の感覚の延長が公共施設の中にもあることを大切にしている。



TURNING POINT
4

# 設計チームとの協働

Interview 石本建築事務所

## tettetteは、複合施設の新しいプロトタイプになる

設計プロポーザルの段階から「大きな賞を取った若手建築家を入れること」が条件でした。畝森さんには直接会いに行って、人柄を含め、チームで一緒にやっていく上でのバランスを取れる方だと思いました。畝森さんと当社で「フラットな関係を築きましょう」と確認し合い、共同設計がスタートしました。

最初に着手したのは体制作り。須賀川市の場合は幸か不幸か、施設内の機能については明確に決まっていませんでした。最初は円谷英二ミュージアムも入っていなかったし、我々もレストランを作りましょうなんて言っていたんです。とにかく基本設計を決める作業が大変でしたね。まずは須賀川市で市民ワークショップを25回行ったのですが、そこで市民の方から震災の話が出た。「震災後、それまであまりお付き合いのなかった地域の人たちと助け合い、つながりができました」という話があり、とても印象に残りました。

複合施設とはどうあるべきか。通常では1、2階が図書館で3階が公民館というように、階によって機能が分かれがちですが、それでは複合である意味がない。図書館に行った人と公民館に行った人たちが、偶発的に出会えるように設計することで、「地域での横のつながりがない」と感じていたという〝市民の思い〟を建築的に解決しようと、「建物全体が図書館であり公民館」となりました。運営も一元化するよう橋本市長にお願いし、関係各課を統括する専門部署として平成26年4月に「市民交流センター整備室」が設置されました。市役所内だけでなく、設計事務所、コンサルタント（図書館や市民協働など）、アートディレクターといった各専門分野のコーディネーターらが横の繋がりを作って推進していく手法も新しかったと思います。

オープンしたら、市民のみなさんには自宅の居間のように思い思いに使ってほしいです。期待しているのは、私たちも予期してなかった使い方。この建物はオープンして1、2年経ってからじゃないと、成功したかどうかわからない。まずはどんどん利用してほしいですね。

十河一樹

佐藤維

株式会社
石本建築事務所

数百人の建築設計の専門家集団として、小学校・庁舎他、全国に多くの公共建築の実績を持つ。